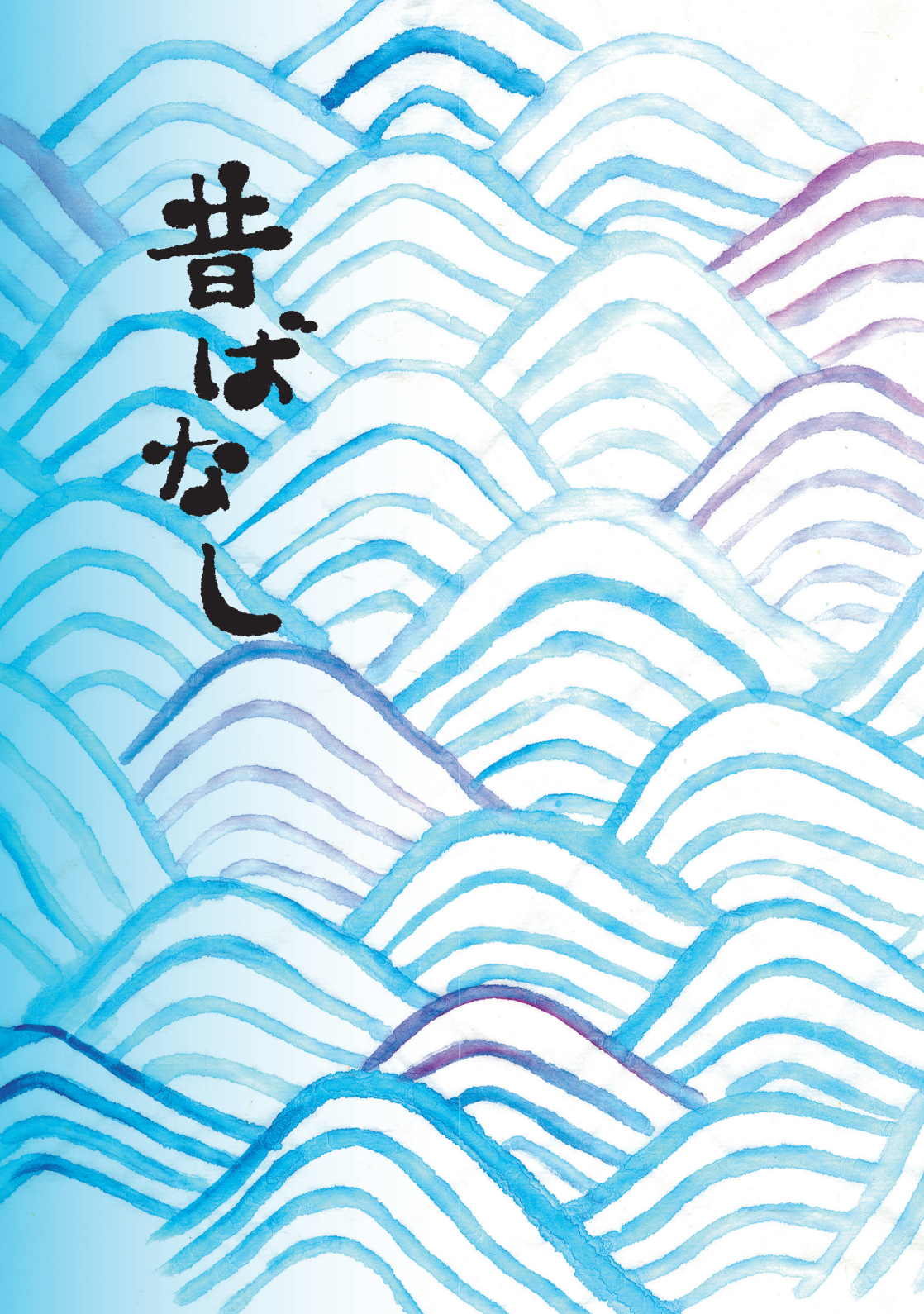


昔ばなし



昔ばなし 凡例

一、本文は、二〇一〇年～二〇一一年度「社会教育だより」

掲載の「はなちゃん」と読む 聖籠昔ばなし」「はなちゃん」と読む 続・聖籠昔ばなし」を修正・再録したものです。

一、昔話の原文は以下の出典収録の民話・伝説ですが、読みやすいように漢字・ルビ等で補い、加筆修正して構成しました。

一、昔話が語られてきたそのままの形を伝えるべく、原文に出てくる方言や表現を尊重し、極力生かすよう努めました。そのため文章にわかりにくい部分が含まれています。

一、難解な言葉や、出典の文献刊行時とは現況が異なる場合などには脚注をつけ、文章末尾で補いました。

一、方言で語られ一般的に分かりにくいと思われる話には意訳解説をつけました。

一、現在では不適切とされる表現が含まれていますが、客観的な歴史や伝承の理解に役立てるためであり、不当な呼称を容認するものではありません。

一、聖籠町内には記録がないものの聖籠に関係する昔話を、佐久間惇一著『しばたの昔話』、中条町史編さん委員会編『中条町史』資料編五より一話ずつ抜粋しました。原文の表現を損なわない程度に一部修正を加えました。

【昔ばなし出典】

猿と蟻／神明さまの森／やまぼと／もっこふんどし／うなぎ釣りのおじいさん／肝試し／網代の海／亀塚浜の位守山のこと／キツネの話／火玉／猿とヒキガエル／猿のところへ嫁に行った話／大蛇の鬼退治／キツネと花子／山王権現のお授け井戸（由来）…『聖籠町誌』

むかしばなし／九十九曲がりの伝説／むかしのはなし…『聖籠町誌』をもとに改変

聖籠のいわれと百合若伝説…『聖籠町史』通史編、『聖籠町史』資料編四（近世下）をもとに作成

小判の虫干し…『しばたの昔話』 抜粋、一部改

関ノ戸八郎治…『中条町史』資料編五 抜粋、一部改

聖籠のいわれと百合若伝説

嵯峨天皇の御代のことです。左大臣きんみつという人に「百合若」という息子がいました。百合若は大人になると右大臣になり、いつしか「百合若大臣」と呼ばれるようになりました。

ある日、蒙古の国の軍が筑紫の博多に攻めて来ました。天皇と父親の命令で、百合若大臣は蒙古軍を迎え撃ち、三年間の戦いの末、遂に勝利をおさめました。

この長い長い戦いですっかり疲れた百合若は、帰る途中、博多湾に浮かぶ玄海島で三日間眠り込んでしまいました。



百合若が目を覚ますと、いったいどうしたことでしよう。一緒にいたはずの味方の軍が誰一人いません。家臣の別府兄

弟が、百合若の活躍に嫉妬して裏切り、百合若を玄海島に置き去りにしてしまつたのです。かわいそうに、一人とり残された百合若は、しかたなく孤島で日々を過ごすことになりました。

そのころ別府兄弟は…。意気揚揚と博多に戻ると、戦に勝つた褒美として、百合若の就いていた筑紫国司の職を賜りました。そして、豊後で百合若の帰りを待つ御台所のところへ行き、「百合若大臣は戦死した」という嘘の報告をして、百合若の形見の品を渡しました。

すっかり騙されてしまつた御台所。悲しさのあまり身を投げてしまいました。しかし、「百合若の形見の品々が山野の塵になるよりは、尊い人に預けて後を頼みましょう。」と思い直し、形見をお寺に寄進すると、百合若の飼つていた十二羽の鷹も放してやりました。

ところが、そのうちの一羽、百合若秘蔵の大鷹「緑丸」がいつこうに立ち去ろうとしません。そ

ここで、御台所は緑丸にご飯を丸めて与えると、緑丸はそれを嬉しそうにくわえて、はるか遠くに飛び去って行きました。

緑丸は玄海島まで飛んで行くと、百合若のもとへやってきました。百合若はもう大喜び。ご飯を受け取ると、さらに緑丸がどこからか探してきた檜の葉に、百合若自らの血で手紙を書きました。

手紙を緑丸に託すと、緑丸は再び豊後に向かつて飛び立ちました。

豊後で木の葉の手紙を受け取った御台所は、百合若の無事を確信し、「百合若大臣は、紙や硯や筆がないから、木の葉の手紙を寄こしたのでしよう。硯をお送りして詳しいお手紙を書いていただきますましよう。」と言うと、女房たちに硯や墨、紙に筆を用意させました。御台所と女房たちからの手紙も添え、それらをすべてまとめて緑丸の尾羽に結びつけました。

「さあ、今度は早く行くのですよ。緑丸！」

心得たとばかりに、緑丸は飛び立って行きました。

懸命に羽をのばして、緑丸は飛んでいきます。しかし、潮の満ち引きにしたがって、硯は湿気を含んでしだいに重くなり、緑丸の高度も徐々に下がっていきました。

「がんばらなくてはい！」と思い、力の限り飛び続けますが、紙も露を含んで重くなります。どんどん、どんどん落ちてゆき…

無残にも、そのまま海に浸かって死んでしまいました。

百合若は、緑丸の帰りを今か今かと待ち続けますが、なかなか帰ってきません。「もはやこれまでか…」と思いつつも、海藻を探しに波打ち際を歩いていると、



岩の間に鳥の羽が少しだけ見えきました。

「緑丸っ！」

なんと、絶命した緑丸が、硯や筆、手紙などと共に玄海島に流れ着いたのです。

百合若は、何度も何度も転びながら緑丸のもとに駆け寄り、緑丸を抱き上げると、それはそれは嘆き悲しみまじりました。しかも、緑丸が亡くなっ
てしまった今となっては、連絡をとることすらできません。

一方、御台所は、百合若が帰って来るようにと、宇佐八幡宮に七日間籠って必死にお祈りをし続



けていました。すると、願いが通じたのでしょうか。沖釣りをしていた壱岐の浦の人が風に流され、偶然にも百合若のいる玄海島まで吹き寄せられてきました。

百合若はこの釣り人に事情を話し、おかげで筑紫まで帰ることができました。さあ、今度は百合若が緑丸の敵をとる番です。

玄海島ですっかり容貌が変わってしまった百合若は、別府兄弟の開いた宴に潜り込みました。百合若は豪腕の弓の名手。他の者では決して引くことのできない愛用の鉄の弓で、兄弟を射かけました。

これにはさすがに兄弟も降参するしかありません。集まっていた人々にも、晴れて百合若の生還を証明することができました。

そして、百合若は無事に御台所と再会し、日本の将軍になりました。



しばらくして。ある僧侶がこの百合若伝説を聞き、たいへん感銘を受けました。「主人のために、まるで人間のように忠義を尽くし、その身を終え

たという鷹の生まれた地はどこだらう。」と思い、各地を訪ね歩いて、やがて聖籠山にやってきました。聖籠山やその周辺には、その昔、たくさん松林があり、鷹が多く棲すんでいたのです。

僧侶は聖籠山にお堂を建て、そこで緑丸の菩提ぼだいを弔とむったということです。

こうして聖者が山に籠ったことで、このあたりが「聖籠」と呼ばれるようになった、とも伝えられています。

※1 室町時代後期～江戸時代初期に流行した「幸若舞」という

中世芸能の演目の一つ。

- 2 第五二代天皇。平安時代のころ。
- 3 「もうこ」のこと。今のモンゴルあたりにあった国。
- 4 今の福岡県にあたる。
- 5 博多湾の玄界島かといわれる。
- 6 今でいう県知事にあたる役職。
- 7 今の大分県にあたる。
- 8 妻のこと。
- 9 貴族に仕える女官。

聖籠町のイメージキャラクター「緑丸」

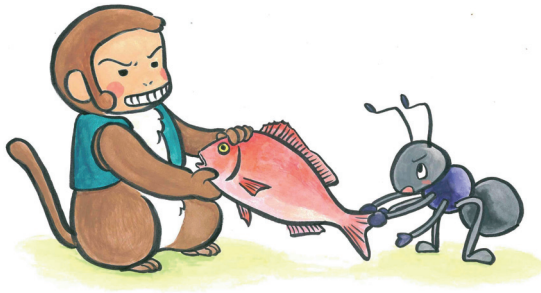
聖籠町大字諏訪山にある宝積院ほうしゃくいんに伝わる縁起（↓P.16参照）では、百合若伝説と聖籠山が結びつき、「聖籠」の地名起源を説いています。この説が事実かどうかはわかりませんが、かつては聖籠山の松林に鷹が棲息していました。

百合若大臣の愛鷹あいよう「緑丸」をモチーフにして、聖籠町では平成九年に町のイメージキャラクターが作られました。現在、友達の「花ちゃん」とともに広報役として活躍中です！



右：緑丸
左：花ちゃん

猿と蟻あり



むかし、猿と蟻が海で鯛取りやっこしていたと。
猿が「おれがさぎ見つけだすけ、おれがもんだ。」と言ったら、蟻が「おれさぎ見つけた。」とケンカしていただと。

したけが、「神様のどこへ行って聞いてみろで」と言ってお宮様へその鯛を置いておいたら、来る人みんな「ありがたい。ありがたい。」と言ってお宮様へ帰っていったと。だから、鯛は蟻のものになって、蟻はその鯛を「うめい！」と言って食めたどさ。

【意識解説】

むかし、猿と蟻が海で鯛の取り合いっこをしていたと。

猿が「おれが先に見つけたから、おれのもんだ。」と言ったら、蟻が「おれが先に見つけた」とケンカしていただと。

そうしたら、「神様の所へ行って聞いてみようぜ」と言うことになって、お宮様の所へその鯛を置いておいたと。すると、来る人みんな「ありがたい。ありがたい。」と言って帰っていったと。だから、鯛は蟻のものになって、蟻はその鯛を「うまい！」と言って食べたどさ。

神明さまの森しんめい

むかし、神明さまの森へ根性のいいとどが、根っこ掘りに行ったけが、金瓶かながめが埋まっていたと。それで、「これは下から授かったものだから、おれのものでない」と言っつて、隣のとどに言うたけが、



隣のとどは「これはいいこと聞いた」と、さっそく掘りに行ったけが、蜂はちの巣になっつてとどに押しかけで来て、とどは「おれに嘘つくだな！」と怒っつて、「晩げ寝でから、

ダラかけてやろう」と思っつて、夜しーんとしてから、屋根を破っつてダラを一生懸命かけていたら、寝ていた根性のいいとどが目を覚まして、どたばたと騒いで喜んでいたど。

隣のとどは、「おれにダラかげられて騒いでいだな」と思っつていたら、翌日、根性のいいとどが、隣のとどに言っつたと。「昨日おれが寝でいたら、天から大判小判がザクザク降っつて来て、おれの寢床、大判小判で埋まっつたど」と話したと。隣のとどは嘘だと思っつて見に行っつたら、本当だっつたど。

隣のとどは、「おれが根性曲がっつていたんだ」と思っつて、それから真面目に働くようになっつたどさ。

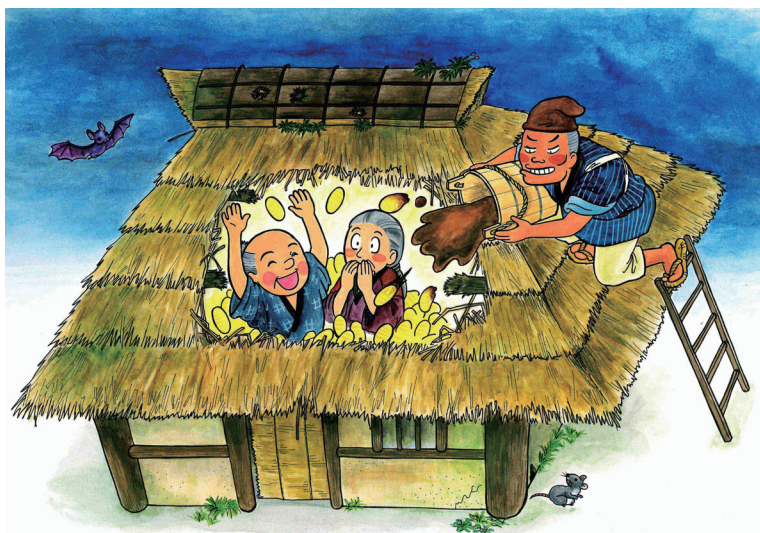
神明さまというのは、今の次第しだい浜分校はまが建っつていたあたりだど。

【意識解説】

昔、正直な父ちゃんが（初夢に天から福が授かる夢を見て）神明様の森に根っこを掘りに行っつた

ら、金瓶が埋まっていたそう。それで、「これは（夢で見たように、天からではなく）下から授かったものだから、おれのものじゃないな」と言っ隣父ちゃんに話した。隣父ちゃんは「これはいいことを聞いた」と、さっそく金瓶を掘りに行ったとき。ところが、金瓶の巣が蜂の巣に変わっていて、蜂が隣父ちゃんに押し付けてきたと。

隣父ちゃんは「おれに嘘ついたらな！」と怒って、正直な父ちゃんが夜寝たところをダラ（人糞肥料）かけてやろうと決めた。そしてシーンと寝静まった。隣の父ちゃんは家の屋根を破ると、一生懸命にダラをかけはじめた。さ。寝ていた正直な父ちゃんが目覚まして、ドタバタと騒いで喜んでいた。隣の父ちゃんは、「おれにダラかけられて騒いでた



な」と思っていた。翌日、正直な父ちゃんが、隣の父ちゃんに話した。「昨日おれが寝ていたら、天から大判小判がザクザク降って来て、おれの寝床が大判小判で埋まったよ。」

隣の父ちゃんが嘘だと思っって見に行ったら、本当だった。隣の父ちゃんは「おれの根性が曲がっていたんだ」と反省して、それから真面目に働くようになった。神明様の森というのは、今の次第浜分校が建っていたあたりだよ。

※1 昭和四十年ころの話。現在の亀代こども園のあたり。

やまばと

むかしむかし、あるところに一人の男の子がいました。その男の子は親の言うことを聞かないで、反対のことばかりしていました。「山へ行け」と言えば海に行き、「海に行け」と言えば山に行きました。

ある日、お父さんが死にそうになったとき、お父さんは「川へ埋めてくれ、と言えば山に埋めるに違いない」と思って、その男の子に「お父さんを川に埋めてくれ、頼む。」と、それだけ言い残して死んでしまいました。そうしたら、その男の子は「お父さんが死んでしまったのだから、お父さんの言う通りにしなければならぬ」と



思って、川に埋めました。

そして、嵐がやって来ても、雪が降っても、大雨のときでも、必ずお父さんのお墓にお参りしたので、とうとう山鳩になってしまいました。

言うことを聞かない子どもが、親の最期の願いだけは聞く、という類の昔話は、「あまがえろ雨蛙不幸」などの題名で全国に広まっています。話の最後で子どもが雨蛙になってしまい、雨蛙の鳴く訳を説いて結びます。

この昔話「やまばと」は、なぜ子どもが山鳩になるのか不思議ですが、どうやら途中が抜けているようです。「雨蛙不幸」から類推しますと、「川のそばにお墓を立てたので、大雨が降った時に墓が流され、子どもは悲しくて泣いているうちに、とうとう山鳩になってしまった。(だから山鳩は鳴くのだ)」という展開なのでしょう。

似たお話として「とび鶯不幸」「山鳥不幸」などがあり、さらに韓国にも「雨蛙の嘆き」というお話があります。いずれも、親不孝をいましめながら、親と子の絆を語り込めたお話です。

もっこふんどし

とんとん昔があつたてがのうのう(あーあー)。
ずんずとばが住んでだつたど。

いつか、ばがニワ掃^{*1}いてだつたけが、ニワに
豆一つ拾^{*2}だど。「半分豆にして、半分こうせんに
する。」で言うだど。

ばが「ずつさずつさ、隣行つて『ふうらい』
借りてきてくれや。」と言うだど。したけが、ず
んず「よすきた。」と言うで、隣行ごうとしたら、
もっこふんどし外して、屁、ポーンとふつて、こ
うせんみんな飛んでいったどさ。

【意識解説】

とんとん昔、あつたとき。あーあー(合いの手)。
じいさんとばあさんが住んでいたとき。

ある日、ばあさんが台所を掃いていたら、豆を
一つ拾^{こうせん}つたど。「半分豆にして、半分香煎にする。」

と言つたとき。

ばあさんが、「じいさん、じいさん。隣に行つ
てフルイ借りてきておくれ。」と言つたど。そう
したら、じいさんが「よすきた。」と言って、隣
に行こうとしたら、もっこふんどし外して、屁、
ポーンとふつて、香煎みんな飛んでいったとき。

※1 土間。昔は土間に台所があつた。

2 いわゆる「むぎこがし」。大麦を炒り焦がし、挽いて粉にした
ものに砂糖と水分を入れて練つたもの。



うなぎ釣りのおじいさん

むかしむかし、うなぎ釣りの好きなおじいさんがいました。

ある日、大きなうなぎを釣りました。あまり大きくて、重くて竿が上がりません。

「ええいっ！」力いっぱい上げたはずみに、うなぎは川を飛び出して、ぶうん、と向こうの山まで飛んでいきました。

「逃げられたら大変、もつたいない。」

おじいさんは、うなぎを追いかけて、向こうの山まで走っていきました。行ってみて、おじいさんは驚きました。うなぎのそばに、イノシシが一頭倒れていまし



た。

イノシシは昼寝をしていたのです。そこへうなぎが落ちたのです。イノシシは、うなぎに打たれて死んだのです。

「うなぎとイノシシが一度に取れたぞ。今日は何といい日だろう。」おじいさんは喜びましたが、イノシシは重くて手に持てません。「縄で縛って背負っていこう。だが、ここには縄がない…。そうだ、藤のつるを縄の代わりにしよう。」おじいさんは、藤のつるを見つけました。両手で藤のつるを引っ張ると、山芋のつるが絡まっていて、藤のつると一緒に、山芋がズルズルと抜けてきました。

「これはこれは、また大儲けだ。」おじいさんは、山芋を調べてみました。十本ありました。

「こうたくさんあつては、持ちきれない。ちょうどあそこに茅がある。藁の代わりに、あの茅でツトコを作って入れていこう。」茅が一株ありましたから、鎌でギクリ、刈り取りました。

バタバタバタ、茅が動いて鳥の羽が見えました。キジが隠れていたのです。鎌で切られて暴れ

たのです。キジを引っ張り出すと、茅の中に白いものが転がっています。

「あれあれ、キジの卵だよ。」みんなで十三ありました。

おじいさんは、イノシシを背中に背負いました。うなぎを右手にぶら下げました。左手には茅のツトコを持ちました。そして村に帰ると、村の人を呼んで一緒に食べました。



ツトコ (藁苞)

藁でできた入れ物。
卵や納豆などを包むほか、
煮物などのおかずも入れました。

雪入道や狐などになる

十二月七日の晩。「大眼」と呼ばれる一つ目の怪物がカマスを担いでやって来た(この怪物は、家によつては雪入道や狐などになる)。悪い子どもがいると、カマスに入れてさらっていく。これを防ぐため、各家庭では目の多いフルイやザル、糊通しなどを門口や台所口へぶら下げ、おく。怪物はザルの目を数えているうちに夜が明けてしまい帰るという。数えるのが困難のようにフルイやザルの目は細かければ細かいほど良いとされる。また、椋のようなトゲのある木の葉を添える場合もある。

この風習を北蒲原郡では「おっかなげの晩げ(おっかなの晩げ)」と言い、厄神除けの行事として行なう。聖籠町では

道賀新田を中心に山倉地区で多く行なわれた。岩船地域の関川、東蒲原地域の三川や津川、南魚沼地域の六日町などでも同様の風習があったという。出てくる怪物の種類もさまざま。片目小僧、三つ目小僧、鬼、餓鬼など集落や地域によつて違うからおもしろい。

本来は「事八日」の前夜が「おっかなげの晩げ」とされたが、新暦の採用で混乱し、十二月七日、一月七日、二月七日、三月七日のいずれの例も見られる。現在では見られなくなった行事の一つだ。



▲「大眼」と思われる妖怪(右)



カマス ワラ製の入れ物。塩や肥料が入っている。ワラシロを二つ折りにして縫い閉じたもの。

事八日 東日本では旧暦二月八日(お事始め)と十二月八日(お事納め)を併せた呼び方。



肝試しきもだめ

むかしむかし、網代あじろの部落で若い衆が集まって、肝試しをやっていた。この肝試しというのは、墓地に行つて塔婆とばを持って来て、またそれを墓に返しに行くのである。

若い衆は塔婆を全員持つて来て、元の所に次々に返してきたが、さて、ある若者の番になった。特に臆病な若者は、塔婆を返しに行つて、自分の着物の裾すそを塔婆と一緒に墓に挿してしまった。それを知らない若者は、てっきり、幽霊に引つ張られたと思い込んで、あまりのショックで心臓麻痺まひを起して、墓地で死んでしまったそうだ。

※1 そとば（卒塔婆）ともいう。死者供養のため墓石の後ろに立てる木の板。

網代の海

むかし、網代の海で十一月二十六日、九人の漁師を乗せた船が、立て網たみをしてあみいた。その日は、ものすごい大漁だった。漁を終えて帰ろうとしたとき、急に大きな黒雲が出てきて、たちまち大嵐になった。とうとう船はひっくり返って、乗っていた人は全員死んでしまった。



翌年の八月十三日、同じ網代の浜で、夜網を引いていた。すると、佐渡の方に一つ、岩船の方に一つ…というように、九つの明かりが見えてきた。はじめは何か分からなかったが、近くなるにつれて、よく見ると、そ

れは、タライに乗って掻かいで来た骸骨がいこつが、近づいて来るのだった。

すると一人の老人が「おめえら、いづまでも、よそどこいねで、帰るどこ帰れや」と言うくと、タライに乗った九つの骸骨たちは、さーっと集まってきたと思うと、ものすごい音とともにぶつかつて、西の方の空に帰って行ったという。



※1 定置網で魚を捕る漁法の一つ。

小判の虫干し

聖籠町藤寄^{ふじよせ}に鬼ゴツチヨ[※]にまで、「吉兵衛の巾着^{きんちやく}、絞れば金が出る。」

と歌われた長谷川吉兵衛という旦那様があった。その吉兵衛が貧乏になって、竹藪^{やぶ}を売り、竹藪起こしをした。

秋のある天気の良い日だった。竹藪の脇から大ネズミが二匹、木の葉をくわえて出てきた。木の葉を日当たりのいいところに並べて、また穴へ入っていく。また木の葉をくわえてくる。しばらくすると、今度は小



判を一枚ずつくわえてきて、その葉の上に並べて行つた。つまり、虫干しをしたわけだ。

それを隠れて見ていた男は、「しめた。」と、小判を木の葉に包んで、懐深く入れて知らんふりしていた。

三時ごろになり、日が西に傾きかけると、ネズミが小判を取りにきた。二匹はしきりに捜すが見つからない。

やがて穴に入つて行つた。しばらくすると、茶碗の壊れたようなものをくわえてきた。

何をするのかと見ていると、その中に手を入れて、オテント様を拝んでは穴に入っていく。茶碗の中にひとたれの水のようなものが入っているらしい。さあ、ネズミがぞろぞろ出かけて来ては、同じように水を手につけては拝んで穴に潜つて行く。こんなに多くいるのかと思うほどのネズミの数である。

やがて、みな済んだのかネズミが出なくなつたので、その父^{とと}つあも「俺もやってみよう」と思つて、水をつけて拝んで、さてと手を離そうとする



と、くつついて離れない。さあ大変と想着て足を手にやったら足までくつついてしまった。

離そうとゴロゴロと転んでいるが離れるどころでない。そこへ大ネズミが二匹やってきた。そして、懐の中にチヨロチヨロと入り込んで小判を捜している。父つあは、こちよばたいが、^まどうしようもない。そのうちに、ネズミは小判を見つけてくわえて消えて行った。それから五分もたつと、手足がひとりでに離れた。

※1 鬼ごっこ。

2 むずがゆい。



亀塚^{かめづか}決^{かは}の位^い守^{もり}山^{やま}のこと

位守^{※2}山市川神社は、今から六、七百年前、ある武士が流れ着いてこの小宮堂^{おみどう}を見つけ、この小宮堂のおかげで助かった有難い宮だが、「人に腰かけられては気の毒だ」と思い、その小宮堂と一緒に一週間くらい過^あごしたそうです。

ある日、夢に「気の毒だと思ったら、高い所へ上げてくれ」という神様のお言葉を聞いて、現在のあの山を幾日かかったかわかりませんが、積み上げて宮を山の上に祀^{まつ}ったということです。

この市川神社には三体の兄弟神様がいらっしやるということです。それは、作物と龍と雨乞いの神様だそうです。姿を松の木に変えて、田畑や沖を通る船を見守っているそうです。

ある日、心ない人が「邪魔になる。」と言って松の枝を切ったら、松の木から血が出てびっくり



したそうです。その枝は神様の手だったということとです。島見浜しまみはまの巡査が、この堀へ魚を釣りに来てたくさん釣って、太郎代たろうだいの土佐大工とさにナマズをやったら「夕飯に食べた時、このナマズ、身が柔らかいかな」と言って食べたそうです。そしたら、その晩から二晩も続いて赤い舌を出して「お前が俺を食べたと同じように、俺もお前を飲み込んでやる」という宮の主の声のする苦しい夢だったそうです。それでお魚を食べた人がお堀に来てみた

ら、夢に見たと同じ所だったそうです。そこで食べた人は、心からお詫びを言ってお参りして帰ったということです。

現在^{*3}、市川神社は部落民全部から大切に祀られております。

※1 かつては現在の新潟東港工業地帯の位置に「亀塚浜」があり、

位守山は亀塚浜集落にあった。集落の移転に伴い、位守山の現在の地番は位守町になった。

2 旧市川神社（史跡公園）を指す。現在の市川神社は集落と共に移転し、亀塚集落にある。

3 昭和五十年代ころのこと。

むかしばなし

むかしむかしのお話です。

あるところに、仲の良い親子がありました。その家には、小さい子どもがいて、名前を「アキ」と言いました。両親はアキをたいそう可愛がって、とても幸せでした。

しかし、ある日突然不幸が起こりました。その家のお母さんが急に亡くなったのでした。

お父さんは「この子のためにも母親が必要だ」と思い、新しくお母さんをもりました。その新しく来たお母さんは、自分の子どもではないアキが、憎くて憎くてたまりません。

そこで、お母さんは天井にホオズキを吊り下げ、そこまで届くはしごも掛けておきました。その下には、煮え立ったお湯のいっぱい入った大きな釜^{かま}。

そんなことを知らないアキは、案^{あん}の定^{じよう}、はしごを上っていきました。もうすぐホオズキに手が届



くという所まで上りつめると：お母さんは、はしごをぐるっとひっくり返しました。

アキはそのまま釜の中にダボーンと落ち、その場で死んでしまいました。お母さんはアキを玄関の上がり台の下に埋めて隠しました。

夜になってお父さんが帰って来ると、お母さんに「アキはどうした？」と尋ねました。お母さんは素知らぬ顔で、

「栗拾いに行つてまだ帰つて来ないよ。もうすぐ帰つてくるだろう。」と答えて外に出てみました。すると、カラスが鳴いています。

ままははに うらみだ

ホオズキくろで とだまかして

ピーヨロ ドボーン …

と、何度も言うではありませんか。

不審に思つたお父さんは、次の日、お母さんが出かけている間に家の中を捜しました。そしてとうとう、大火傷やけどをして変わり果てたアキの姿を見つけ出しました。お父さんは、それはもう悲しんで、せめてもと、アキのために立派なお墓を作つ

てやりました。

そこにお母さんが帰ってきました。今度はカラスが

アキをころしたものはでていけと歌っていました。

お母さん

は、お父さんにひどく

叱られました。その後、

お父さんは

お母さんと別れ、お寺

に入つて一生過ごしま

したとき。



キツネの話

村に古いキツネがいだどさ。もう、真っ白い毛だらけのキツネが住んでいだどさ。村の人が相談して、どうがしてあのキツネを捕りたいもんだ。村中に触れて、森の出口に追い込んだどさ。キツネはたまげでお寺に逃げて「助けてくれ。」と頼んだどさ。



和尚わしやうさんが出てきて、「うん、うん、どうしたんだい。」と聞くと、キツネは「村の衆に追っ

かけられて逃げ

場がないから、どうか助けてくだせい。」と言うだど。和尚さん「ああ、よしよし。」と押入れの中に隠してくつたど。

ところが村の衆が来て「和尚様、和尚様、たった今、キツネが逃げて来たんだが、わがらねがねし。」というだど。「いや、いや、そんなものなつて来ねがったな。」と、和尚様が言うだど。「いや、いや、逃げて来たはずだ。そこら捜させてくだせ。」と村の衆が言うのと、「いやいや、来ね、来ね。」と和尚様が言うので、村の衆は、しかたねで帰ったどさ。

キツネが喜んで「ありがだがった。何してお礼しよば。」と考えて、「和尚様は、女子おなごたちがねえもの、女子たちになつて、飯炊ままたきして恩返ししよ



う。」と、だいぶ長いこといたそうだ。

そしたら今度、子どもができて、ある日「和尚さん、和尚さん、おれ子どもがきそげだすけ、どうかお産するどこ見ねでくたせ。」と言うだ。和尚様は「ああそうがい、そうがい、見ね、見ね。」と言うで、ある日小屋がけしてやってそこに住ませだど。

和尚様は
見とで見と
で、戸の隙間すきま
からそろつ
と覗のぞいだど
さ。

すると、大
きなキツネ
がお産して
子どもを舐な
めてだつた
と。和尚様に
見られたキツ



ネは、お寺にすることができねで、「もう恩返しもしもだし、森へ帰ることにしようだい。」と決心したど。

子ども抱いで、乳飲ませで、口に筆をくつまえで、流れる涙を硯水すずりみずにし、こう磨すつてさ、こう墨付けで、この筆をくつまえで、こう書き起こしたどさ。

いやいや、おまえはいくらキツネの子だと言われとも、障子しょうじだの、行灯障子あんどんだの切ったり、兄弟の友なんか殺したりなどささなや。 ※1
と。

今度は、和尚様にお願ねがいして行いくこと思うで
どうぞ、この子にあのホウシヨウの巫ま置いで行
くすかい、子どもが泣ないだら、それを敵なめらせ
てくたせい。そうせば子どもはきつと黙もるすか
ね。それでもまだ泣く時は信太しのたの森ままで来てく
だせ。

と書き置きして出かけて行つたどさ。
和尚様は「なんぼキツネの子でも可愛かわいいもんだ。」
と言つて可愛かわいがつていだどさ。



ある晩、泣いて泣いて泣いてしようねで、ホウシヨウの玉を舐めらせたら、なるほど、そんま黙っただどさ。もう大丈夫と思うでたら、また泣いで泣いで、どうしてしようねで、今度はすもだの森へ出かけで行ったでは、キツネが出てきて乳を飲ませでくれだどさ。キツネは「もうこれで大人になる。大丈夫、大人になりますすけ安心してください。」と言うて別れていってしもうたどさ。

【意識解説】

村に古くから棲すむ真っ白い毛のキツネがいました。村の人が相談して、「どうにかしてあのキツネを捕りたいもんだ。」と言っていました。

ある日、村人たちは村中に触れ回って、そのキツネを森の出口へ追い込みました。キツネはびつくりしてお寺に逃げ込むと、「助けてくれ。」と頼みました。

和尚わしやう様が出てきて、「うん、うん、どうしたんだい？」と聞くと、キツネは「村の人たちに追

かけられて逃げ場がないから、どうか助けて下さい。」と言いました。和尚様は「ああ、よしよし。」と押入れの中に隠してくれました。

村人たちは寺まで押しかけ「和尚様、和尚様。

たつた今キツネが逃げてきたんだが、わからなかったですか？」と尋ねました。「いやいや、そんなもの、ちつとも来なかつたよ。」と和尚様。「いやいや、逃げてきたはずだ。そこらを捜させて下さい。」とさらに村人たちが食い下がると、「いやいや、来ない、来ない。」の一点張り。押し問答の末、村人たちはしかたなく帰って行きました。

キツネが喜んで、「助かつた！ありがたい！何してお礼をしようかしら。」と考えて、「和尚様には家事を世話する女性がないもの。女性になって、ご飯炊きして恩返ししよう。」と、だいぶ長いこといたそうです。

そうしたら今度、キツネに子どもができました。ある日「和尚さん、和尚さん、私、子どもが生まれそうだから、どうかお産するところを見ないで下さい。」と言いました。和尚様は「ああそ

うかい、そうかい、見ない、見ないよ。」と言って小屋掛けしてやって、そこに住まわせました。

和尚様は見たくて見たくて、戸の隙間からそつと覗いてしまいました。すると、大きなキツネがお産して子どもを舐めていました。和尚様に見られてしまったキツネは、もはやお寺にすることができなくなつて、「もう恩返しも終わつたし、森に帰ることにしましょう。」と決心しました。

子どもを抱いて乳を飲ませ、口に筆をくわえて、流れる涙を硯水にし、こう磨つてさ、こう墨付けて。この筆をくわえて、こう書き起こしました。

いやいや、お前はいくらキツネの子だと言われ
ても、障子だの行灯障子だのを敵め切つたり、
兄弟の友（人間）を殺したりなどしてはいけま
せんよ。

今度は、和尚様をお願いして行こうと思つて、

どうぞ、この子にホウシヨウの丕を置いていくの
で、子どもが泣いたら、それを舐めさせて下さい。
そうすればきつと子どもは黙りますから。それで
もまだ泣く時は、信太の森まで来て下さい。

と書き置きして出かけて行きました。

和尚様は「いくらキツネの子でも可愛いもんだ。」と言って可愛がっていました。

ある晩、子どもがひどく泣くので、ホウシヨウの玉を舐めさせたら、なるほど、そのまま黙りました。もう大丈夫と思うと、また泣きはじめます。

そこで信太の森へ出かけて行くと、キツネが出てきて乳を飲ませてくれました。キツネは「もうこれで大人になる。大丈夫。大人になりますから安心して下さい。」と言って別れて行ってしまうましたとさ。

※1 「チョウチョやトンボを押さえて食べるな、唐紙や障子を舐

めて切るな、よその子にかまうな」などの語り方もある。

キツネの子どもに対する戒めを書き留めている。

2 大阪府和泉市の信太山にある森。葛の葉稲荷があり、信太キツ

ネの伝説地。



こ瞽女

通常 2～3人で組んで
家々を回る

「キツネの話」は、古浄瑠璃や瞽女唄の「葛の葉（子別れ）」として有名で、古くから親しまれています。

瞽女とは、鼓を打ったり三味線を弾いたりしながら歌い、旅をして歩く盲目の女性芸人です。特に上越の高田や長岡の瞽女集団が組織的な活動で知られています。歌われた曲目は、民謡・流行歌・説教節など幅広く、たくさん曲や話が伝えられました。

瞽女の来訪は農村の人々に心待ちにされたようです。娯楽として、他地域の様子を知るための情報源として、重要な役割を果たしていました。近年、残念ながら瞽女の継承者は途絶えてしまいました。

火玉ひだま

むかしむかし、晩になると、火玉が飛んで歩いて、みんなが「おつかね、おつかね。」と言って、早はよ飯まんま食くて、早はよ寝まんまだどさ。すたけが、きつかねとどが「その化け物をしとめてやるぞ。」と縄一本たがいて、火玉を追いかけて行いったけが、川の崖がけの方かたへ行いったけが、消きえたど。

「ここにおのつたが。」と思おもって、川の崖のぞを覗のぞいたら、木きに今いまでも落おちそうにななって、金かな瓶びんがぶら下ぶらがあっていで、そのとどが縄なわで瓶びんを担かいで、家いへに帰かえったど。

それで、らくらく暮くらしたど。

【意識解説】

むかしむかし。晩ばんになるとは、ひよろりひよろり、火ひの玉たまが飛とび回まわっていました。みんなは「怖こい怖こい。」と言いって、早はやくくご飯ごはんを食くべ



て寝ねてしままうことことが常じょうでした。ある日ひ、利きかん気きな父ちちちゃんちゃんが「その化まけ物ものをしとめてやるぞ。」と縄なわ一本いっぴん持もって、火ひの玉たまを追おいかけて行いきましました。川かわの崖がけのほうほうまでたどり着つくと、ふふつ、と火ひの玉たまは消きえてしままいました。

「ここここにいたか。」と思おもって崖がけを覗のぞくと、今いまにも落おちそうにななって、金かな瓶びんが木きにぶら下ぶらがあっています。父ちちちゃんちゃんは縄なわで縛しばって瓶びんを担かいで、家いへに帰かえりました。おおかげで、らくらく暮くらしたそうさうです。

猿とヒキガエル

あるところに、猿とヒキガエルが良い田を作ったとき、一反を二匹で作ったとき。ある日、ヒキガエルが言うには「猿どん、猿どん、今日は日もよし、天気もよし、田ぶちに行こで。」と誘ったとき。すると、猿は「いや、せつかくだども、今日はなんだか頭がいどで気の毒だども、おまえばっか行つてくたせ。」「いやあ、困つたな。」と、ヒキが一人で行つたとき。

二、三日もいで「猿どん、猿どん。今日は日もよし、天気もよし。今日ばっかし、あいでくだせ。」とヒキが言うとき、「いや、今日はまだ腹が病めて、とつても行がれそうもね。」と猿が言うだど。「やーや、大変だ。おめ、まだどうしたで。」とヒキが言うとき、「いや、腹痛めで、とつても行がんね。」と猿が言うだど。ヒキは「そうせばしかたね。」と一人で行つたど。

また二、三日むくど秋になり、稲刈りになつた





ど。猿をば誘いに行ったど。「猿どん、猿どん、今日は稲刈りだすか、あいにくたせ。」とヒキが言う。「いやーや、今日はこころあたり腰がいで、とつても働かんね。」と猿が言ったど。ヒキは「せば、おれ一人ですわね。」と一生懸命稲刈りしたり、はさ掛けしたり、臼挽きしたりしたど。

いよいよ米にする時になって、ヒキが「猿どん、猿どん、今日は臼搗いで米にしたいが、あいでくだせ。」と言うと、猿が「ほんだの、今日は行ごか。」と言うだ。二匹一緒に臼搗いだど。

米ができて、猿が「餅搗いで。」というので、「よがる。」とヒキも

言うで、二匹で搗いだど。

餅ができたど。ヒキが「どうして分けるばね、猿どん。」と言うと「ふんだ、ひと釜餅にして、あのお宮様のきだ橋のつから転がし、早よ行ったものが食うことにしようだ。」と猿が言うだど。「せば、そうしようが。」とヒキが言うたので、猿は臼のまんまお宮様のきだ橋に登ってゴロゴロと転ばしたどさ。猿は、さっさと転がった臼と一緒に下におりたどさ。ヒキはバタクタ、バタクタと追っかけたどさ。

猿が臼見たら、餅はなんでもねがったど。餅が臼から取れて屋根にみんなひっかかってしよもだど。ヒキがバタクタ歩いて「やや、これは、いことした。」と言うで「うまい、うまい。」と食べたどさ。

猿はけなりでけなりで、あかんとして「おめばつかかねで、おねも一つくらせ。」と言うだど、「だんがさ、うんだわね。」と言いながら食うだど。猿は、食いとで食いとでしようねども食うことならねがったどさ。

いつか、昔がつつさけた。

【意識解説】

あるところに、猿とヒキガエルがいて、二人で良い田を一反作ったとき。

ある日、ヒキガエルが「猿どん、猿どん。今日は日もよし、天気もよし。田んぼを耕しに行こうよ。」と誘ったとき。すると、猿は「いや、せつかくだけど、今日は何だか頭が痛くて、気の毒なんだけど君だけ行ってくれよ。」「いやあ、困ったな。」と、ヒキが一人で行ったとき。

二、三日して「猿どん、猿どん、今日は日もよし、天気もよし。今日ばかりは付き合ってくれよ。」とヒキが誘いに行くと、「いや、今日はまたお腹が痛くて、とても行けそうもないよ。」と猿が言った。「やーや、大変だ。君、またどうしたんだい。」とヒキが心配すると、「いや、お腹が痛くてとてもじゃないが行けないよ。」と猿が言うので、ヒキは「そうすれば、しかたない。」と一人で行ったとき。

二、三日経つと秋になり、稲刈りになったと。猿を誘いに行ったと。「猿どん、猿どん、今日は

稲刈りだから、付き合ってくれよ。」とヒキが言うと、「いやーや、今日はこころへの腰が痛くて、とてもじゃないが働けないよ。」と、猿が言った。ヒキは「ならば、僕一人でするよ」と、一生懸命稲刈りしたり、はさ掛けしたり、臼挽き（脱穀）したりしたと。

いよいよ米にする時になって、ヒキが「猿どん、猿どん、今日は臼搗ういて（精米して）米にしたいから、付き合ってくれよ。」と言うと、猿が「そうだな、今日は行こうか。」とやつと腰を上げた。二人で一緒に臼搗うきをして米ができた。猿が「餅もちを搗うこうよ。」と言うので、「いいよ。」と、二人でペツタン、ペツタン、搗ういたとき。

餅もちができた。ヒキが「どうやって分けようか、猿どん。」と言うと、「そうだね、ひと釜がま餅もちにして、あのお宮様の階段から転がして、早く行った者が食うことにしよう。」と猿が提案した。「じゃあ、そうしようか。」とヒキも賛成。そこで猿は臼のままお宮様の階段に登ってゴロゴロと転がした。猿は、さっさと転がった臼と一緒に下におり

たとき。ヒキはバタクタ、バタクタと追っかけたとき。

猿が臼を見たら、餅は何もなかったと。餅が臼から取れて、屋根にみんな引っかかってしまったと。ヒキがバタクタ歩いて「やや、これはいいことした。」と言って、「うまい、うまい！」と食べたとき。猿はうらやましくくて、うらやましくくて、どうしようもなく、「君ばかり食べないで、俺にも一つくれよ。」と言ったけれども、「いいや、嫌だね。」といいながら食べた。猿は食べたくて食べたくてしかたなかったけれども、食べるこゝとができなかったとき。

いつか昔がつつさけた。

※1 刈り取った稲を干す作業。

2 粃を玄米にする粃すりのこと。

3 精米。

昔話の結び言葉にはいろいろな種類があり、地域色が濃く表れています。例えば、北蒲原地域では「とんとんむがつつさげた」「いちごぶらんとさがった」などがありますが、佐渡地域では「いちごはんじょうさけた」などで結びます。この文言自体には、特に意味はありません。

結びの句に対して、初めの句（発句）もあります。こうした言葉がお話の前後につく理由としては、昔話が伝説や世間話と区別されており、聞き手に昔話を聞く心構えが要求されたためだと思われます。

猿のところへ嫁に行つた話

あるところに、三人の娘をもつたじじさがいたどさ。じじさが長いこと、あんばい悪^わりで、畑の草も取らんねで、草ぼうぼうになつてしょもだどさ。そこで、一番姉娘を呼んで「おめ草取りしてくんねが。」と頼んだどさ。姉娘は「おら頭病^やめて、しとね。」と言^ううだど。

じじさはしかだねで、二番娘に「草取りしてくんねが。」と頼んだど。二番娘は「おら腹病^めめる。」と言^うて逃^げて行^つたど。じじさは、がっかりして、うんうん唸^{うな}つて寝^てたど。

そこへ猿が来^ただど。「じじさ、じじさ。何そんなに唸^つているだね。」と聞^くので、じじさが「おれは、あんばい悪^うで草取りできねし、娘もなかなか言^うこと聞^いてくんねし、困^つたもんだ。どうだね。おまえ、草取^つてくんねがね。そうせば娘一人嫁^にくれるが。」とじじさは、せつなまぎれに猿に言^うだど。猿は喜^んで、ちゃっちゃんと草

取りしてしょもだど。

翌日、猿が本当に娘もらいに来^たどさ。じじさは困^つてしょもで、うんうん唸^つて寝^てたど。姉娘が「どうしたんだい、じじさ。」と聞^きに来^ただど。「おまえ、猿のどこ、嫁^に行^つてくんねが。」と頼^むと、「ばかばかし、猿のどこなて、だが行^こば！」とぶんぶん怒^つて行^つてしてしょもだど。

じじさが、またうんうん唸^つていると二番娘が来^ただど。二番娘も「ばかばかし、もんぼれじじ！」





と怒って悪たれついで行ってしょもだと。

今度は末娘が来たど。末娘は愛しげでいい子だったと。じじさが「おまえ、猿のとこ嫁に行つてくんねが。」と頼むと「あい。」と言って猿のところへ嫁に行ったどさ。

イチゲン※に、家へ揃そろって帰ることになったと

さ。餅もちを搗ついたどさ。猿が餅を重箱に入れようとすると、「うちのじじさ、重箱に入れると、重箱臭いと言うで嫌いだ。」と娘が言うので、猿が今度はお鉢に入れようとすると、「お鉢に入れると、お鉢臭いと言って嫌いだ。」と言うたど。猿は、しかたねで、臼に入れたまま餅を担いで里帰りに出かけたどさ。

途中まで来たてば、桜がきれいに咲いでいたので、娘が「うちのじじさは桜が大好きだが、枝振りのいいの取つてくたせ。」と頼んだど。猿が、臼を下におろそうとすると、娘が「うちのじじは土臭い餅は嫌いだ。」と言うので、猿はしかたなしに臼を担いだまま木に登ったどさ。猿は「これいいが、あれいいが。」と聞くども、娘は「もつと上、もつと上。」と言うでるうちに、枝がポッキンと折れて、猿が池の中に落ちて死んでしもうだどさ。

いつか昔がつっさけた。

【意識解説】

あるところに、三人の娘をもったおじいさんがいました。おじいさんは長いあいだ具合が悪く、畑の草取りすらできないものですから、畑が草ぼうぼうになってしまいました。そこで一番姉の娘を呼びました。「おまえ、草取りしてくれないかね。」と頼むと、姉娘は「私、頭が痛いから、したくないわ。」と言いました。

おじいさんは、しかたなく二番目の娘を呼んで「草取りしてくれないかね。」と頼みました。二番目の娘も「私、お腹痛いの。」と言って逃げて行くではありませんか。おじいさんはがっかりして、うんうん唸^{うな}って寝込んでしまいました。

そこへ猿がやって来ました。「おじいさん、おじいさん、何をそんなに唸^{うな}っているんだい？」と聞くので、おじいさんが「俺は具合が悪くて草取りできないし、娘もなかなか言うこと聞いてくれない。困ったもんだ。どうだね、おまえさん。草取ってくれないかね。そうすれば娘を一人嫁にやるが。」と、せつなまぎれに言いました。猿は喜

んで、さっさと草取りをしてしまいました。

翌日、猿が本当に娘をもらいに来ました。おじいさんはさらに困って、うんうん唸^{うな}って寝ていました。姉娘が「どうしたんだい、おじいさん。」と、聞きにきました。「おまえ、猿のところへ嫁に行ってくれないかね。」と頼むと、「ばかばかしい！猿のところへなんて、誰が行くもんですか！」と、ぶんぶん怒って行ってしまいました。

おじいさんが、またうんうん唸^{うな}っていると、二番目の娘が来ました。話を聞くと、二番目の娘も「ばかばかしい！ポケじじい！」。怒ったあげく悪態^{あくたい}をついて行ってしまいました。

今度は末娘が来ました。末娘はかわいくていい子です。おじいさんが「おまえ、猿のところへ嫁に行ってくれないか。」と頼むと、「はい。」と返事して猿のところへ嫁に行きました。

イチゲンに、家へ揃^{そろ}って帰ることになりました。餅^{もち}を搗^ついたので、猿が餅を重箱に入れようとすると、「うちのおじいさんはね、お餅を重箱に入れると、重箱臭いと言って嫌うわ。」と娘が言

いました。猿が今度はお鉢に入れようとすると、「お鉢に入れると、お鉢臭いと言って嫌いよ。」と言われてしまいます。しかたなく、猿は臼に入れたまま餅を担いで里帰りに出かけました。

途中まで来ると、池のほとりに桜がきれいに咲いています。娘が「うちのおじいさんは桜が大好きなの。枝振りのいいのを取ってちょうだい。」と頼みました。猿が臼を下におろそうとすると、娘が「うちのおじいさんは土臭い餅は嫌いよ。」と言うので、猿はしかたなしに臼を担いだまま木に登りました。猿は「これがいいかい。あれがいいかい。」と聞くけれど、娘は「もつと上、もつと上よ。」とくり返します。

そのうち、枝がポッキンと折れて、猿は池に落ちて死んでしまいましたとさ。

いつか昔がつつさけた。

※1 嫁と婿が夫婦そろって初めて嫁の実家に帰る里帰りの習慣。

地元で語られてきた昔話や伝承には、その土地の歴史や先人の知恵、そこから得た教訓がたくさん詰まっています。

東日本大震災で大きな津波被害を受けた宮城県気仙沼市には「みちびき地蔵」など、津波の恐ろしさを語った昔話が伝わっています。津波が頻繁に起こる地域には、似たようなお話が多く伝わっているそうです。昔話といえども軽視できない事例でしょう。

昔話をおとぎ話のように楽しむのもよいですが、歴史・風俗・言語・地学等さまざまな観点から、あるいはその昔話の起源を探ったり、伝播くわんぱのしかたなどを見たりするのもおもしろいものです。いま一度、身近な昔話を見直してみませんか。



九十九曲がりの伝説

昔のこと。黄金輝く稲田の中を、くねくねと蛇のように曲がって流れる川がありました。この川は、「九十九曲がり」とよばれ、源を蓮濁の八万荊郷カネ濁に発し、木崎村で新発田川に続い



ていました。

八万荊郷は今から三百年ほど前、およそ江戸時代の中頃には、葦が生い茂り、原始そのままの果てしなく広がる荒地でした。

その当時、袋津の在に小野寺八郎右工門という郷士がいました。

ある日、八郎右工門は、百姓二、三人を連れて、舟でゆらゆら揺られて九十九曲がりを通り、ついにカネ濁に到着しました。彼らは、まだ誰も足を踏み入れたことのない林野を切り開き、大変苦勞して蓮濁部落をつくり、その祖となりました。こうしてできた蓮濁の地には、九十九曲がりに関する、あるお話が伝わっています。

これより、さらに昔のこと。この底知れない神秘の淵には、一匹の白い蛇が住んでいました。「白い蛇」というと、普通は神様の使いのような良い蛇を想像しますが、この蛇はその正反対。とても性格が悪く獯猛^{どつもう}で、年が経つとともにいっそう近隣の村の住民を悩ませていきま

した。

あまりにも悪さが過ぎたのでしよう。ある日とうとう、カネ濁の鎮守^{ちんじゆ}様である庚申^{こうしん}様の怒りに触れ、白蛇は淵から追い出されるこ

とになりました。

そこで蛇は庚申様にお願いしました。「どうかこの地にいさせて下さい。ここを追い出されては、住むところがなくなってしまう。」

庚申様は少し考え、「では、一夜のうちには百曲がりある川をつくりなさい。その川に住むのならば、お前の悪さも許してやろう。」と条件を出しました。

こうしてはいられません。白蛇はさっそく、一生懸命に川を掘り始めました。一つ、二つ、三つ…と、曲がりくねった川をどんどん、どんどん掘り進めます。そして、ようやく九十九の曲がりまできて、あと一曲がりまで完成するという寸前…





あかつき
暁を告げる鶏の鳴

き声が、夜の静けさ

を破って朝霧の中に、甲高く響き渡りました。

悲しいかな、庚申様との約束通り、白蛇は千歳の恨みを飲んで、永遠にこの地を去らなければなりませんでした。やがて日の光が輝くにつれて、大蛇がのたうつような「九十九曲がり」の流れが、



そこに横たわって
いました。

それからしばらく

後のこと。新発

田藩に封ぜられた

溝口侯が、家来を

引き連れて鴨狩り

をしに、カネ湯に

やってきました。

溝口侯は神技と思

われるばかりに、

次々と無数の鴨を

射落としましたが、

どうしたことか鴨が一羽も水面

に浮かんできません。

不思議に思った家来が泳いで行って見てみる

と、鴨の姿はなく、草むらの陰に白蛇が鎌首をも

たげて盛んに毒気を吐いていました。鴨は皆、蛇

に吞まれていたのです。
これ以来「九十九曲がり」を掘った白蛇が、カネ



潟の主として再来した」という噂が広まりました。

それからいつのことでしょうか。五月さみだれ雨降る黄昏たそがれの時、一人の旅の僧侶が「九十九曲がり」の橋なむしの袂たもとで高いびきをかいて寝ていた白蛇の姿を見たことがあった、と伝えられているだけで、白蛇の姿を見た者はいませんでした。

「九十九曲がり」は世の中の移り変わりとともに、その姿かたちを変えてきましたが、川の流れは今もなお、稲穂を育て続けているのです。

※1 旧豊栄市木崎にあたる。

2 旧亀田町袋津のことか。江戸時代前期には新発田藩に袋津村があったとする記録もある。

3 農村に居住する武士の総称。生産に直結し富裕者が多い。

4 道教の影響を受けた民間信仰「庚申信仰」の本尊。青面金剛など。



むかしのはなし

むかしむかし、あるところに、父と母とじいちゃんと、子どものシヨウ坊の四人が暮らしていました。

父は体が弱くて、毎日医者に通わねばならず、暮らしに困っておりました。シヨウ坊が二つの頃、とうとう父は死んでしまいました。暮らしの足しにと、母が働きに行きました。

「働いたお金はすぐ送ります。」と言って出ましたが、一か月たっても母から返事がありません。シヨウ坊とじいちゃんは、毎日指折り数えて、母が帰って来るのを待っていました。

三か月たっても返事がありません。お金に困るので、じいちゃんが村の人から藁わらを借り、それで草鞋わらじを作り始めました。

シヨウ坊はじいちゃんのために藁わらを打ってやります。じいちゃんが藁わらを編んで、草鞋にしました。そうしてできた草鞋を町に売りに行き、売ったお金で、米を買ったり、味噌を買ったりして暮らし

ました。

気がつけば、じいちゃんは八十歳、シヨウ坊は五歳になっていました。よその子どもは休みになれば、父と母に手をつながれて、楽しく遊んでい

ます。幼いシヨウ坊には、とても寂しくつらい日々でした。

ある日ついに、シヨウ坊はじいちゃんに頼みました。

「父と別れて五年間、母と別れて二年間、私わたしほど因果いんがなものはない。父に会いたくても、父はこの世にいない

ので会うこともできません。せめて母に一目でも会



「いたいです。」

シヨウ坊は、母を捜しに出ることになりました。

じいちゃんが、雨が降って困るといけなからと、
合羽かっぱを肩に掛けてくれました。首には袋を提げて

くれました。そして、「この村を越えてよその村に
入ったら、人様に『一厘りんなりともお願ひします』

と言いなさい。貰もらったら、頭かしらを下げて『ありがと
うございました』と言うんだよ。」と教えました。

家を出て二週間がたちましたが、なかなか母に
は会えません。シヨウ坊は、あんまり悲しくて、



うらの細道の山の陰に立っていました。そこへ、
五十ばかりのおばあさんが通りかかりました。

どこへゆくつもりか、この山登ればどこか

おばあさんは、「何が悲しいのかそのわけを聞
かせておくれ。」とシヨウ坊に聞きました。

シヨウ坊は「父ちゃんと別れて五年、母ちゃん
と別れて二年になりました。父ちゃんはこの世
にいないので会えません。よその子どもは、休み
になれば父ちゃんと母ちゃんと三人で手をつない
で、遊んで歩きます。私は父ちゃんに会えなくと
も、せめて母ちゃんには一目でも会いたいと思
い、ここに立っております。」と訴えました。

おばあさんは、「この山は三里り四方しほうのお山。お
前はまだ子ども。とても登ることはできないで
しょう。しかし、この山を登れば、お大師様のお
屋敷です。」と教えてくれました。

シヨウ坊は、あんまり母に会いたいがために、
山でも岩でも登りました。「お大師様にお願ひし
て、母に会わせてもらいたい。」と、三日三晩、
登り続けました。岩につかまりながら、ようやく

三日目の明け方に、お山の上に着きました。そして、お大師様のそばまで行って頼みました。

「母に会いたいです。どうか会わせて下さい。」

すると、お大師様は「この山を下りなさい。」

と言うと、錦にしきに包んであるお守りを、シヨウ坊の背中に掛けてくれました。それから、「このお守りは、お前の身を護るお守りなので、体から離してはいけません。この山を下れば、一週間以内に母に会えるでしょう。」と告げました。

またシヨウ坊は、三日三晩かけて山を下りました。「一厘なりとも」と人様をお願いして回り、一週間がたちました。しかしどうしたことが、母には会えません。



シヨウ坊が遠くの方を見ると、小さい家があったので、またお願いに行きました。すると、母がいるではありませんか！

戸口に立った母は「裏口の方へ来なさい。」と、こっそり言いました。シヨウ坊

が裏口に回ると、母はシヨウ坊の顔をよく眺め、

「お前はシヨウ坊だな。」と言いました。

母がシヨウ坊の胸につかまって泣きました。親不孝、子不幸でした。

それから二人はじいちゃんの所に帰りました。シヨウ坊がよそ様から貰ったお金が袋にいっぱい入っておりましたので、三人は幸福に暮らしたといえます。



※1 計算上年数が合わないが、昔話の原文のとおり。

2 昔のお金の単位。一円⇨千厘。現在の1円とは価値が異なる。

3 距離の単位。1里⇨約4 km

大蛇だいじやの鬼退治

とんとん昔があったてがのう。

若者があったてが、ある日大雨で、若者のところへ女子おなごが雨宿り貸してくれで来たてが、雨は晴れても、行けばよいが行がねがったてが、女子が若者見れ



ばまだ独り身のようだが、女子が「まだ独り身だつたら、おれば嫁にもろでくれ。」どようだが、若者が「こんだも良がったら、嫁になつてくれ。」そ

うようだど。

それから結婚して長い年月送ったど。そして、その女子がほほもつようになつたど。

女子が若者に「ほほもづようになつたが、三十三尋ひろさきの小屋建ててくれ。」でようだど。女子が「おれ、そこ行つてほほもづづけ、二十一日過ぎるまで見ねでくれ。」でようだど。

若者が、「二十一日過ぎるまで見ねでくれ」でようだど、二十一日過ぎねこまね、小屋の隙間すきまから覗き見すてだつたど。覗き見したてば、女子が三十三尋の長さの大蛇になつて、ほほ生まれて、そこに遊んでだつたど。

二十一日過ぎだてば、小屋がらいい姉さなつて、ほほ負ふで来たど。ほほの名は「百合ゆりわか若大臣」。かがが、「二十一日過ぎる



まで見ねでくれでようだが、見たすけ、おんねひま隙くつてくれ。」てよだど。若者が、かがに「隙はくれつとも、このほぼどうする。」でようだど。かがが、「目の玉を子どもに預けとけば、独りひとりでに育つから。」と言って、自分の目の玉を若者に渡したど。

かがが「おれは近江おうみの湖*2へ行く。」でようど、若者わかしにようでいっただど。毎日若者は、ほぼば負ぶで勉強教えでだっだど。ほぼが泣けば、目の玉をやつて遊ばせでだつたど。

ところが、役人の人たちに「それは何物だ。」と言われ、目の玉を取り上げられてしょもだど。取らつてがらは、ほぼが泣いてどうしょもねがつたど。

若者が、近江の湖というところ行つて、「かがやーい。かがやーい。」と呼ばつたど。そしたら、



三十三尋の大蛇おろちになつて、水の中から出て来たど。かがが「何しなにに来た。」でそうよだど。とどが「目の玉役人に取られ、ほぼが泣いてしようがねすけ、あつたらもう一つの目の玉くれ。」でそうよだど。

すると、かがが「おれは、もう一つの目玉くつたらめくらになるが、子どもがかわいいすけくれる。」でそうよだど。だすけ、「朝あげなつたら朝あげの鐘*1、晩ゆふげの鐘*2、晩ゆふげになつたら晩ゆふげの鐘*3鳴らしてくれ。」でようだど。



【意訳解説】

とんとん昔があったとき。

あるところに若者がいました。大雨のある日、若者のところへ女の人が雨宿りさせてほしいとやって来ました。雨が上がっても、女の人とはなかなか出て行きません。女の人が若者を見ると、まだ独り身のようにだったので「まだ独り身でしたら、私を嫁にもらってください。」と言いました。若者は「こんな俺でも、良かったら嫁になつてくれ。」と言いました。

結婚してそれから長い年月を送りました。そのうち、女の人が赤ちゃんをもつようになりました。女の人は若者に「赤ちゃんができたので、三十三尋ゆひろの小屋を建てておくれ。そこでお産をしますから、二十一日過ぎるまで見ないでくださいな。」と言いました。

若者は「二十一日過ぎるまで見ないでくれ」と言われましたが、いてもたってもいられません。二十一日が過ぎないうちに、つい、小屋の間すきまから覗き見してしまいました。なんと、三十三尋の

お産とケガレ

かつて出産は非日常的なケガレとされていました。ケガレには、今でいう「汚い」などのイメージはなく、「神聖で畏れ多い」という意味が込められていました。ケガレが広がらないよう、産婦は出産まぢかになると産小屋（オビヤ）の中に一人籠って生活したといいます。しばらくは家族と接触できず、食物から習慣に至るまで色々な制約ができました。しかし公然と農作業を休めるという利点もあり、必ずしも苦ではなかったようです。

県内では産屋を別棟で建てたりせず、たいてい寝室などを産屋にしつらえたといいますが、県外では集落共同の産小屋で生活した地域もありました。

大蛇のそばで子どもが遊んでいました。

二十一日が過ぎ、大蛇はいい姉さんになって、子どもを負おぶって小屋から出てきました。子どもの名前は「百合ゆりわか若大臣」。

奥さんが「二十一日過ぎるまで見ないでくれと言ったのに、見てしまいましたね。もうここにはいられません。私にお隙ひまをください。」と言いま

した。若者が奥さんに「隙ひまはやるが、この子はど
うするのだ。」と返すと、奥さんは「目の玉を子
どもに預けておけば、独りでに育つから。」と言っ
て、自分の目の玉を若者に渡しました。

奥さんは「私は近江の湖に行きます。」と若者
に言っ出て行きました。毎日、若者は子どもを
負ぶって勉強を教え、子どもが泣けば目の玉を
やって遊ばせていました。

ある日、珍しい玉のことを聞きつけた役人たち
が来しました。「それは何物だ。」と、目の玉を取り
上げられてしまいました。それからというもの、
子どもはどうしても泣きやみません。

困った若者は近江の湖というところへ行くと、
「母ちゃんやーい。母ちゃんやーい。」と呼びま
した。すると、三十三尋の大蛇になって、奥さん
が水の中から出て来ました。

奥さんが「何しに来たのです。」と、言いました。
父ちゃん(若者)が、「目の玉を役人に取られて、
子どもが泣いてしょうがないから、あつたらもう
一つの目の玉をくれ。」とお願いしました。

すると、奥さんが「もう一つの目の玉をあげる
と目が見えなくなってしまうですが、子どもがか
わいいのであげましょう。ただし、一日がわから
なくなると困るので、朝になったら朝の鐘を、晩
になったら晩を告げる鐘を鳴らしてください。」
と言いました。

※1 長さの単位。左右に両手広げた時の距離が一尋。

2 琵琶湖かと思われる。

3 大津市の園城寺(三井寺)の鐘の由来にも。

美しい女性に化けた蛇が、男性に正体を見られて去って
行く、という内容のお話は全国で語られています。「蛇女
房」という題名が一般的で、特に三井寺みいでらの鐘に結びついた
形は、東北地方を中心に広まりました。西日本では、殿様
に目玉を取られた怒りで蛇が自然災害を起こす、という結
末になる場合が多いようです。

聖籠では、なぜか題名が「大蛇の鬼退治」になり、蛇の
子どもが「百合若大臣」になっています。□承していくう
ちに混乱したのが、独自のアレンジを遂げたのでしょう。



キツネと花子

むかし、悪いキツネがいて、そのキツネがの、花子をさらっていったの、そして、そのキツネが人間に化けて、花子と一緒に暮らしてだど。

そして一年が過ぎ、ある夏、キツネ狩りという祭りがあって、そのとき、三郎という子どもと、そのおじいさんが歩いていると、おじいさんが「キツネのにおいがする。」と言って、においのする方に近づいてみると、花子と色の白い女の人が遊んでいての。おじいさんは花子をキツネだと思つて、鉄砲に打つてしまうたど。

そのときそばにいた女の人が、キツネになつて山の方に逃げて行つてしまうたど。

毎日、夜になると人間に化けたキツネが鳴いているそうじゃ。

関ノ戸八郎治

昔、聖籠しだいほまの次第しだい浜部はまべ落に渡辺善辺衛さんという船乗りの家に、たいへん力持ちな八郎治という男がいました。

八郎治は、背の高さが六尺（一八〇cm）以上もある大男で、喧嘩もめつぼう強く、相手に怪我をさせることもたびたびでした。

ある日、八郎治に米つきをさせたところ、力まかせにガツガツとつくものですから、米粒がみんな碎けてしまい、とても食べられたものではありませんでした。

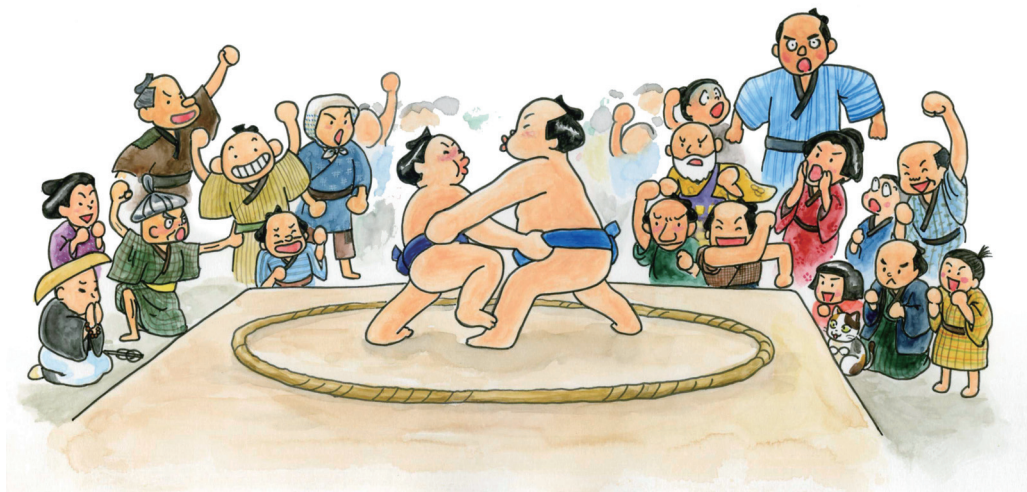


八郎治に仕事をさせると、こんな具合ですから、家に置いておいても、役にたたないばかりか、村の人たちにも迷惑をかけるばかりでした。

そんな八郎治を、雇いたいという人が現れました。関川村の渡辺三在衛門さんざいゑもんさんでした。この人は庄屋として村の代表的立場にあるので、何かあったときに自分の身を守るための用心棒にと、八郎治を雇い入れたのでした。

ちょうどその頃、相撲すもうがとても盛んになり、江戸相撲はもとより、田舎相撲いなかといつて村々で力自慢の人々が集まって相撲をたて、そこに周辺の人々が加わったりして、たいそうにぎやかでした。八郎治もそういうことは大好きでしたので、方々の村へ相撲をとりに出かけ、どこへ行っても負け知らずでした。

そんな折、江戸相撲の力士たちが地方巡業のためにこの地方にやってきました。田舎相撲で無敵を誇る八郎治は、江戸相撲の関取に対戦を挑みましたが、これを商売としている力士には、とてもかなうものではありませんでした。



「相撲取りになりた
い」そう決
心した八郎
治は、それ
からという
もの毎日乙きのと
の大日様だいにちへ
出かけ、体
を鍛えるた
めにお百度ひゃくど
参りまゐりを始め
たのでした。
そうして
体を鍛えた
八郎治は、
本当の相撲
取りを目指
して、江戸
へ出たので

した。最初は「荒海八郎治」という、しこ名でし
たが、主人のため、郷土のためにと一生懸命が
んばり、上位に位置するようになると「関ノ戸八郎
治」と名前を変えて、前頭二枚目になりました。
そして、八郎治には「敵倍」という、おかしな
あだ名がつけられました。どんな取組にも、負け
たことがなかったためでした。
けれども地方巡業では、その地方出身の力士に
花をもたせるために、自分が負けなければならな
い事もありましたが、いざ勝負になると八郎治は
相手を投げとばし
てしまっ
のがほと
んどでし
た。そう
なると観
客は殺気
だち八郎
治は命か



らからその場から、逃げ出すのが常になりました。

そうこうしているうち、八郎治も年をとっていききました。そこで、主人の三在衛門さんは自分に対して一生懸命にやってくれ、江戸に名を残す力士になった功績をたたえて、八郎治に乙に家と田んぼを分けてくれ、分家を出してくれました。

こうして、十九年間の相撲生活もここで終わりました。そして文化二年（一八〇五）に亡くなるまで、乙の地でのんびりと暮らしたということです。

今、八郎治の六代目にあたる渡辺齊さんがこの家を守っているということなのです。

※1 岩船郡下関村（現関川村下関）の大地主、渡辺家の三左衛門氏のこと。邸宅は県重要文化財。

2 胎内市乙に所在する乙宝寺を指す。本尊の一つに胎蔵界大日如来が祀られていることから、「きのとの大日様」と呼ばれる。

国重要文化財の三重塔などがある。

3 神社や境内で一定の距離を百回往復して、その度に拝むこと。

歴史に残る関ノ戸八郎治

宝暦七年（一七五七）に次第浜の渡辺善右衛門家に生まれました（宝暦十二年という説も）。下関村の豪農渡辺三左衛門家に奉公し、一六歳で江戸へ出て、関ノ戸徳右衛門に入門しました。この時、身長六尺（約一八二cm）、体重二八貫（一〇五kg）であったといえます。

二二歳で「関ノ戸」を襲名し、翌年西前頭二枚目で新入幕を果たすと、以後は常に前頭上位で活躍。人気力士となりました。その活躍ぶりは、江戸時代の越後の名著、鈴木牧之の『北越雪譜』で「近年相撲に越海・鷲力浜は新潟の産、九紋龍は高田今町の産、関戸は次第浜の産なり」と紹介されるほどでした。

寛政四年（一七九二）、八郎治は江戸上野寛永寺のいっほんほうしんのつう一品法親王（りんのおうじみや輪王寺宮）から神像・赤地錦幕・菊桐紋のぼり幟を下賜され、次第浜の山王社（日枝神社）に奉納しました。（↓p.24参照）

三八歳で引退すると、乙村乙宝寺の門前通りではたご旅籠「関戸屋」を営みました。乙宝寺参詣客や相撲取りの化粧まわしの見物客で繁盛したようです。文化二年、四九歳でこの世を去ると、乙宝寺境内の墓地に葬られました。

山王権現のお授け井戸（由来）

当神社境内地表参道社前に一老杉あり。その枝下南方に現コンクリート製側の小井戸があるが、これは当神社お授けと称されるもので、その湧出する水をもって、願主の意によつて使用する時は、靈驗効能の著しい事は今に衆人の認めるところである。

そもそも、この井戸は明治二十四年の掘削に始まったのであるが、ある人、当時眼病を患い平癒祈願のため、当神社に参籠し、たまたま底地に清水の湧き出ているのを見つけ、その水で眼を洗う一層の祈願をしたところ、遂に靈驗あらわれたため、衆人にこれを知らせ相謀つて粗製の井戸を掘ったのがそのいわれである。それ以来幾十年間にわたり、この存在は近郷一般はもちろん、遠く北海の地にもひろまったのである。

大正十三年に、氏子相謀り、神殿社守として高橋源太郎という者をここに置き、前記の井戸水を

用いた温泉場を設けたのである。

しかしながら、営利を目的としたものではなく、当社参拝にあたり心身の洗浄場とし、希望者の喜捨によつて経営してきたものであるが、本湯を一度浴びたものは、その効能をよく知り、年をおうて栄えたのである。



お授け井戸の痕跡

左上：昭和53年頃 右下：平成23年撮影

引用および参考文献

- 阿賀野市所蔵「水原代官所」
稲田浩二・小澤俊夫編（1984）『日本昔話通観 第10巻
新潟』同朋舎
上野和男 他編（1987）『新版 民俗調査ハンドブック』吉
川弘文館
大島建彦 他編（2001）『日本の神仏の事典』大修書店
加治川村（1986）『加治川村誌』
株式会社クボタ（1979）『アーバンクボタ』No.17
佐久間惇一（1986）『しばたの昔話』新発田市古地図等刊行会
佐藤治助（2000）『村の暮しと葉』とうほうぶつくす11
新発田市教育委員会（1975）『阿賀北（う）ぜとうぜ唄集』新
発田市民俗資料調査報告書
新発田市立図書館所蔵「正保越後国絵図」
新村出（1991）『広辞苑』第四版、岩波書店
水原町役場（1978）『水原町編年史』第1巻 水原町史編
さん委員会
鈴木牧之 編撰、岡田武松 校訂（1982）『北越雪譜』岩波書店
聖籠町誌編さん委員会（1978）『聖籠町誌』
聖籠町史編さん委員会（2007）『聖籠町史』通史編
聖籠町（1986）『聖籠のあゆみ』聖籠・亀代合併30周年記
念写真集
聖籠町食生活改善推進協議会（1989）『聖籠の食文化をたずねて』

- 中条町史編さん委員会（1992）『中条町史』資料編5 民俗・
文化財
中条町史編さん委員会（2004）『中条町史』通史編
新潟県（1982）『新潟県史』資料編22 民俗・文化財1
民俗編1
新潟県教育委員会（1982）『越佐の小正月行事』無形の民俗
文化財記録 第7集
新潟県教育委員会編（1996）『日本民俗調査報告集成 中部・
北陸の民俗』三一書房
日本民話の会（1991）『ガイドブック 日本の民話』講談社
久野健 編（1975）『仏像事典』東京堂出版

せいろうまちの文化財と昔ばなし

平成二十三年十月初版発行 平成三十年五月三版発行

発行 聖籠町教育委員会

〒957-0117

新潟県北蒲原郡聖籠町大字諏訪山1280番地

☎ 0254-27-2121

印刷 昭栄印刷株式会社

